

# ダンスの教育的価値に関する一考察

## A study on the educational value of dance.

1K05B113

指導教員

主査 友添秀則先生

下高原 愛

副査 杉山千鶴先生

### ＜本研究の動機・目的＞

2007 年 11 月、中央審議会「審議のまとめ」において、平成 23 年から完全実施の学習指導要領に中学校 1、2 年のダンスの必修化が示された。幼い頃からクラシックバレエに関わってきた私にとって、この決定は非常に興味深いものであった。競争社会の中で生きる現代の子どもたちが今、一昔前では考えられないような悲惨な事件を起こし日々問題となっている。その理由の一つとして、人がそれぞれ持つ喜怒哀楽という感情の表現の仕方が不足しているせいではないかと考える。私は自分自身の踊りの経験を通して、踊ることで自己を表現することへの喜び、大人数で踊るコールドでは仲間と協調することの重要性を感じてきた。ダンスが成長過程の子どもたちにもたらす影響は大きいと私は信じている。身体を動かす事が苦手な生徒にとっては、音楽を利用したダンスが運動という一つの活動の入口となることもあり得る。確かにそのような生徒にとっては、長時間運動することは苦痛とを感じるだろうが、知らず知らずのうちに体を動かすことが出来るのが、ダンスの魅力の一つではないかと考える。しかし、これまでの学校体育の中のダンスについて歴史を振り返ってみると、戦前・戦後を通じてダンスが必要か否か、という論争が常にあったことが分かった。そこで、今回のダンス授業必修化への決定を機に、卒業論文のテーマを「ダンスの教育的価値に関する一考察」と設定し、特に学校ダンスに関して論争や議論が多く行われていた昭和初期の様子をクローズアップしていきたい。過去の学校ダンスの変遷や考えを考察することで、現在ダンスが体育

にどのような位置として置かれ、何故数々の論争の故にダンスが未だ存在しているのか。さらに人々がどのような見解のもとに学校教育の中でダンスを捉えているのかを明確にし、そこから学校ダンスの教育的価値を見出していきたいと思う。

### ＜本研究の方法＞

本研究の方法として、「体育の科学」や「體育と競技」等の雑誌や本を用いた文献研究を軸とする。

### ＜各章の概要＞

章立てとしては、まず第 1 章は史的考察を行い、学校体育に「踊り」が初めて取り入れられた明治時代から、最も論争が多く行われていた昭和時代までの変遷を追う。明治時代にはダンスの前身である遊戯教育に関する事と当時の日本の情勢によるダンスと女子の結びつきを見る。大正時代については遊戯教育の変遷を追いながら、女子教育者としてダンス教育に力を入れた二階堂トクヨに着目し、昭和時代は指導要領の変遷を細かく考察していく。2 章では、昭和初期に「體育と競技」という雑誌の中で繰り広げられた吉田清・大石峯雄・三浦ヒロの 3 者の主張をそれぞれまとめながら、何故ダンス教育を不要とするのか、何故ダンスを学校教育に取り入れようとするのか、各々の意見を考察していきたい。そして最終章では、「舞踊は芸術なのか、体育なのか」という課題に対しその他の論者の様々な視点からの主張を述べる。さらに、ダンスの本質はそもそも何だろうか、という疑問を文献の中から明らかにし、ダンス

の教育的価値について考える要素とする。指導や評価など現在でも課題となっている問題点についても取り上げる。最後に、昭和時代に生きた論者達の視点から、ダンス授業が生徒にもたらすプラス効果を身体的・精神的・社会的・レクリエーション的な場面から考察していきたい。

実際に自分が受けてきた体育授業としての「ダ

ンス」についての経験を踏まえながら考察し、さらに長く関わってきたクラシックバレエについて、体育で取り入れる種類の「ダンス」とどのような違いがあるのかにも触れていきたいと思う。

全体を通して、体育授業で行われるダンスがいかに教育的価値を持って成長過程の子供たちに好影響を及ぼすことができるのか、言及していく。